# ウメ移植後の収量推移


| | |
|---|---|
| 誌名 | 群馬県園芸試験場報告 |
| ISSN | 03867609 |
| 著者名 | 村岡,邦三 |
| 発行元 | 群馬県園芸試験場 |
| 巻/号 | 11号 |
| 掲載ページ | p. 55-56 |
| 発行年月 | 1983年2月 |



農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council Secretariat

群馬園試報（Bull. Gunma Hort. Exp. Stn.）11：55－56. 1983.



# ウメ移植後の収量推移

村 岡 邦 三

# Yields of Japanese Apricot after Transplanting

Kunizô MURAOKA

## Ⅰ 目　　的

密植したウメ園では，一定年数を経過すると園内が混み合い，縮間伐が必要になってくる。間伐樹を移植し，他の園で利用する場合や，一定年数を経た樹を，縮伐し，新しく結果部を作り収量増加をはかる場合に，縮伐後の収量がどのように推移するか検討されていない。そこで一定年数を経たウメ樹の縮伐移植後の収量の推移を調査し，収量の回復状態をみた。

## Ⅱ 調　査　法

１９７１年１２月に前橋市江木町の農業試験場圃場に植栽されていたウメ樹を，縮伐（主枝を徒長枝の発生している１ｍ内外のところまで切りもどし，主枝には徒長枝は２～３本残した。）し，佐波郡東村の園芸試験場圃場に移植した。移植後の年次別に収穫量を調査し，移植前の最高収量と比較し，収量の回復状況を調査した。

調査品種と移植時の樹令は１０年生養老，甲州最小，８年生玉英，花香実，７年生鶯宿，太平，６年生信濃小梅である。

## Ⅲ 結果および考察

ウメ樹（６～１０年生）を主枝に２～３本の徒長枝を残して縮伐し，移植後の収量の推移を調査した。

移植後３年目までは，結果部を構成するために，枝の伸長をはかり，徒長枝を利用して骨格作りをおこなった。結果する部分も少なく収量は若干量であった。

移植後４年目になると結果部も拡大し，一定の収量をあげることが出来た。縮伐前の最高収量に比べて，最高は養老の７６％，最低は太平の４２％で，平均すると５２％であり，縮伐移植後４年で最高収量の半分程度か２／３程度まで回復した。

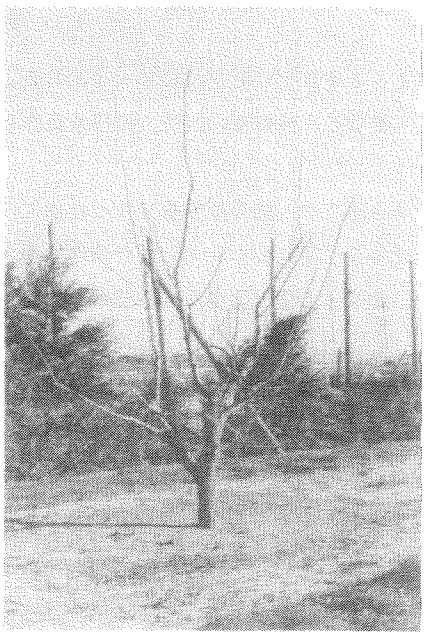
移植後５年目では，最高は太平の１０８％で，最低は鶯宿の６５％で平均は８６％であった。移植５年目で太平，花香実，信濃小梅は移植前の最高収量とほぼ同程度の収量まで回復した。

移植後６年目を迎えると，最高は信濃小梅の２３６％，最低でも鶯宿の１０８％で，すべての移植した樹が，移植前の最高収量を越えた。特別に収量の多かった信濃小梅を除く６品種の平均は１３３％であった。

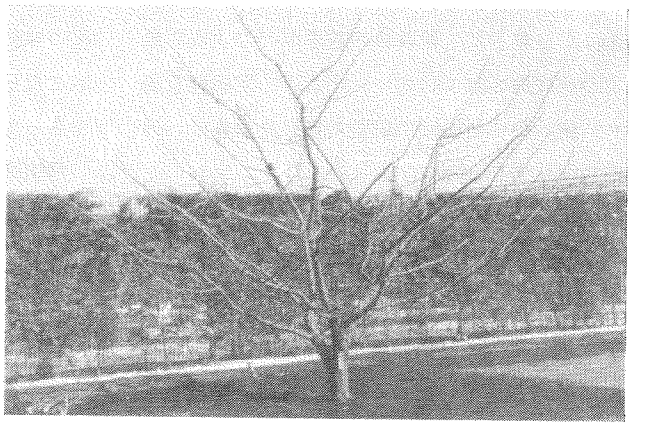
以上の結果から，ウメ樹（6～10年生）を縮伐移植した場合に，品種や，年における豊凶の差による相異はあるが，5～6年を経過することによって，縮伐移植前の樹形に回復し，収量も最高時収量まで回復することが明らかになった。

第1表　ウメの縮伐移植後の収量推移

| 品種名 | | 養老 | 玉英 | 花香美 | 鶯宿 | 太平 | 甲州最小 | 信濃小梅 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 移植時の樹令（年） | | 10 | 8 | 8 | 7 | 7 | 10 | 6 |
| 移植前の最高収量(kg/本) | | 36.8 | 23.0 | 32.8 | 34.2 | 29.0 | 23.4 | 19.5 |
| 移植後年次と収量（kg／本） | 4（1975） | 28.1 | 10.2 | 18.0 | 16.4 | 12.1 | 12.2 | 9.2 |
| | 5（1976） | 28.7 | 18.8 | 32.0 | 22.3 | 31.5 | 18.0 | 18.1 |
| | 6（1977） | 51.0 | 32.1 | 48.9 | 37.0 | 38.3 | 38.1 | 46.0 |
| | 7（1978） | 69.5 | 95.7 | 62.7 | 77.9 | 61.1 | 47.6 | 26.8 |
| | 8（1979） | 54.1 | 91.4 | 73.2 | 99.9 | 65.8 | 64.1 | 55.2 |
| | 9（1980） | 37.4 | 31.0 | 42.8 | 50.8 | 42.9 | 24.1 | 7.5 |



第1図　移植後2年目の冬（玉英）



第2図　移植後5年目の冬（玉英）